愛新覚羅溥儀の墓所について

松田徹

はじめに

愛新覚羅溥儀は、中国史上最後の皇帝として知られる人物である。彼は、「満洲国皇帝」や戦犯といった紆余曲折を経て、最後は、中華人民共和国の一公民としてその生涯を終えた。

筆者は、かねてより溥儀（以下、一般の呼称にしたがい「溥儀」と記す）の生涯には並々ならぬ関心を持っており、溥儀関連文献の訳注等を試みたことがある（注 1)。また、機会を見つけては、溥儀ゆかりの場所を訪ねてきた。

それら溥儀関連史跡探訪は、紫禁城すなわち現在の故宮博物院から、溥儀の生家である醇親王府（現在はその一部が「宋慶齢旧居」として公開されている)、天津の「静園」、長春の「偽満皇宮博物院」、撫順の「戦犯管理所」、さらには溥儀が晩年を過ごした北京の住居跡までに及んだ。

そして、昨年夏（2017 年 8 月)、ついに長年来の望みがかない、河北省易県にある溥儀の墓所も訪問することが出来た（注 2)。本稿においては、この溥儀永眠の地についての見聞を記すとともに、溥儀がここに葬られた経緯やその意義について、若干の考察を試みたい。

Ⅰ　溥儀の死から埋葬まで

溥儀は、1967 年 10 月 17 日、北京の人民病院でその生涯を閉じた。享年 61 歳であった。

当時、中国は文化大革命の混乱期で、しかも元皇帝という経歴を持つ溥儀の死後の処理は、慎重にならざるを得ない状況にあった(注 3)。遺体を火葬するのかそれとも土葬に付すのか、またどこへ埋葬するのかが当面の問題であった。周恩来総理からは、立派な陵墓を造営して土葬しても構わないと伝えられたが、未亡人の李淑賢はじめ弟溥傑ら

は、そうした提案を断っている。遺族が出した結論は、火葬にして遺骨を北京郊外の八宝山にある人民共同墓地に安置するということであった。死後 2 か月近く経った 12 月 22 日、墓石や墓碑も建てず、一般市民と同じように遺骨を骨灰堂の中に保管したのである。

1980 年 5 月 29 日、溥儀のために盛大かつ厳かな追悼大会が催された。それは、かつて彼と同じく戦犯となり釈放後は同僚でもあった王耀武、廖耀湘の 2 人と連名で行われたものだった。鄧穎超、烏蘭夫ら中国共産党および国家指導者らが献花した。中国共産党中央統一戦線工作部副部長、全国政治協商会議副秘書長劉寧一は弔辞の中で、溥儀ら 3 名の生前の政治思想や職務態度を褒めたたえた。この式典は、文化大革命中とは打って変わり、「公民」となった後の溥儀の業績を肯定評価する意味合いを持つものであった。そして、党中央の指示により、溥儀の遺骨は改めて八宝山革命公墓第一室副舎に安置されることになったのである（注 4)。

その後 1995 年、溥儀の遺骨は、河北省易県の現在の墓所に移された。新たに作られた溥儀の墓は、「華龍皇家陵園」という民間の霊園内にある。この溥儀の遺骨移送とそのいきさつに関しては、当時日本でも報道されている。

ラストエンペラー・溥儀氏、「皇帝陵」に眠る　霊園ＰＲに業者が誘致

【北京３０日＝五十川倫義】映画「ラストエンペラー」でも知られる清朝最後の皇帝、愛新覚羅溥儀氏＝写真＝の遺骨が、北京市内の革命市民墓地から、清朝の皇帝たちが眠る河北省易県の清西陵へ移された。共産主義青年団系の北京青年報が二十九日、伝えた。皮肉なことに実現させたのは、霊園開発の宣伝を図る不動産会社の商魂だった。

遺骨の移転は李淑賢夫人の見守るなか、一月二十六日に行われた。四皇帝、九皇后のほか、妃や皇女ら計七十六人が眠る土地へ、溥儀氏も仲間入りした。

発端は、一九九二年の改革・開放政策の加速の決定。海外で成

功した山東省出身の企業家、張世義さんは、投資熱の最中に帰国、清西陵に続く一帯への霊園建設に乗り出した。昨年暮れの完成後に、溥儀氏の遺骨の誘致を思い付いた。

張さんは、溥儀氏と李夫人の仲人の息子を介し、遺骨の移転話を夫人に打診。突然の話にいぶかる夫人だったが、張さんが「霊園の知名度をあげたい」と率直に目的を語ったことから、張さんを信じ、承諾したという。夫人は、溥儀氏が生前に清西陵への埋葬を望んでいたことを打ち明けた。

溥儀氏の墓地は、皇帝陵の一つ、崇陵から三、四百メートルの場所に定められた。夫人は「彼もあの世で大変、喜んでいることでしょう」と語ったという。

三歳で皇帝になった溥儀氏は、辛亥革命による廃帝、満州国皇帝への即位、ソ連軍の捕虜、新中国での一市民への思想改造と、波乱の一生を送り、一九六七年に六十一歳で死去。遺骨引っ越しに、北京青年報は「歴史に円満な句読点をつけさせる」と見出しをつけている。

（『朝日新聞』1995 年 3 月 31 日　朝刊）

この記事に見られる「華龍皇家陵園」は、紛らわしい名称だが皇帝陵ではない。清朝歴代皇帝の陵墓清西陵と隣接するエリアに位置するにすぎない（写真 1）。しかし、その所在地自体、溥儀の生前の遺志を体現するものであった（注 5）。かつて宣統帝であった溥儀は、奇しくも一代前の光緒帝の隣に永眠の地を得たわけである。

Ⅱ　華龍皇家陵園内の溥儀墓所

「華龍皇家陵園」は、一般人も埋葬されている墓地だが、入り口には「溥儀墓」という案内板が堂々と掲げられている（写真 2）。

筆者は、2017 年 8 月 16 日に当地を訪れた。北京市内からは車で 2 時間半くらいの距離であった。12 時半頃現地に到着した。しかし、係員の昼休み時間中は見学できないと言われ、先ずは隣の崇陵（光緒帝の陵墓）を見た後、14 時過ぎに再訪した。霊園としてはかなりの

規模で、移動用のカートまであった（写真 3）。

溥儀の墓が特別扱いされているのは、霊園内にも場所を示す標識がある（写真 4）ほか、案内の女性がついてきたことでも明らかであった。係員の昼休憩時間中は監視出来ないため、見学ができないようになっていたと推測される。来意を告げると、見学は難なく許可されたが、溥儀の墓以外の写真撮影は許可されなかった。

ちなみに、崇陵見学の際に購入した清西陵のガイドブックにも、溥儀の墓に関する記載がある。そこでは「宣統帝」という扱い方をしている（注 6）。つまり、溥儀が葬られている場所は、皇帝陵ではなく、あくまでも民間墓地ではあるが、その墓は隣接する崇陵をはじめとする、清朝歴代皇帝の墓の一部という認識なのである。

まず、「華龍皇家陵園」という名称自体、皇帝にゆかりのあることをアピールしている。次に、入り口から入ってまっすぐに参道が伸び、あたかも歴代皇帝の陵墓を連想させるような景観を備えている（写真 5）。清朝歴代皇帝が眠る陵墓群に近いというロケーションと相まって、高貴さ、ないしは気品を醸し出そうとしているのは明白である。

そして、この民間墓地のイメージ作りに、最も貢献しているのは、言うまでもなく溥儀の墓なのである。壮大なスケールを持つ霊園の存在自体が、その効果を物語っている。事実、案内の女性によると、霊園の墓地の見学に週末車で乗り付ける人も少なからずおり、分譲価格は最低でも 20 万元ほどするという。

さて、溥儀の墓自体は、かつて皇帝の位についた人物の墓としては、西陵や東陵など清朝歴代皇帝の墓に比べると、極めて簡素である。しかし、一般人の墓とすれば、十分すぎるほどの規模と風格を有しているといえる。特に墓の両脇に華表が屹立しているのには驚かされた。宮殿や陵墓の前に建てられる伝統的な石柱だからである。

ところで、墓石の配置だが、溥儀の墓碑を中心に、2 人の妻、皇后婉容と貴人譚玉齢の墓碑を両翼に配する形となっている（写真 6）。

溥儀には、その生涯において 5 人の妻がいた。婉容（旧清朝の皇后として 1922 年入宮）、文繍（淑妃として婉容と同時に入宮）、譚玉齢

（満洲国時代に貴人として入宮）、李玉琴（譚玉齢の死後入宮）そして、特赦を受け北京に戻ってから結婚した李淑賢の 5 人である。

このうち、文繍は 1931 年に離婚を申し出て、溥儀のもとから去り、李玉琴とは、溥儀が戦犯として撫順にいた時に離婚が成立している。つまり、妻として合葬の対象となるべきなのは、婉容、譚玉齢、李淑賢ということになる。

もともと、最初に墓が作られた 1995 年の時点では、墓石は溥儀のものだけしかなく、婉容と譚玉齢のものはなかった。ただ、墓穴は 3 つ掘られており、それは溥儀、譚玉齢、李淑賢の 3 人を合葬するためのものだったようである（写真 7)。譚玉齢を一緒に葬るのは溥儀の生前の意向でもあり、李淑賢も承知していた（注 7)。

しかし、2001 年 4 月に死去した李淑賢は、現時点で一緒に埋葬されていない。案内の女性は、溥儀夫人李淑賢の遺骨は、「まだ」この陵園へ移されていない、と語っていた。李淑賢の遺骨がこの地ではなく、北京郊外八宝山の革命墓地に埋葬されている理由については、さまざまな憶説を呼んでいるようで、ネット上などにおいても不確かな情報が散見される。彼女自身が溥儀との合葬を望んでいなかったというのであるが、真偽は不明である（注 8)。

Ⅲ　溥儀の墓がもつ表象性

溥儀の墓所にあるプレートには以下のように彼の生涯が述べられている（写真 8)。やや長くなるが、全文を引用した上で、日本語訳を付す。なお、文中の下線は筆者によるものである。

爱新觉罗　溥仪简介

1906 年爱新觉罗・溥仪出生于北京醇亲王府，他的曾祖父为道光皇帝。溥仪即位时只有 3 岁，是清朝最后一位皇帝，也是中国封建帝制历史上的最后一位皇帝，年号“宣统”，故后世称为“宣统皇帝”。

1909 年溥仪登基后，即按着清朝祖制在清西陵选定了万年吉地，并开始施工，后其退位，工程不了了之。

1911 年辛亥革命爆发，溥仪被袁世凯逼迫退位，结束了他短暂的皇帝生涯。
1917 年张勋复辟，溥仪又当了 10 天的皇帝。
1924 年冯玉祥无视优待条件，逼溥仪离宫，溥仪等人几经辗转，最后移居天津租界的张园和静园。
1932 年日本扶持溥仪在满洲地区建立伪满洲国，他成为伪满洲国的执政。
1934 年又改称伪满洲国康德皇帝（1934 年-1945 年）。
1945 年日本战败，8 月 19 日溥仪被苏联红军俘虏，五年后被遣返回中国，关押在抚顺战犯管理所。
1959 年溥仪被特赦出狱，成为中华人民共和国公民。溥仪先后被分配到中科院北京植物园和全国政协文史资料研究委员会工作，他写有一本自传《我的前半生》。
1964 年任中国人民政治协商会议第四届全国委员会委员，1967 年 10 月 17 日在北京病逝。
1995 年 1 月 26 日，溥仪的夫人李淑贤女士，把他从北京八宝山革命公墓迁到了这里，他的一生，由皇帝成为新中国公民，伴随着中华民族的崛起和新生，跌宕起伏，见证了中国从孱弱到强盛，民族从衰败到兴旺。

溥仪最终以平民身份归葬到华龙陵园，同他的一后一妃合葬在一起，标志着中国社会的巨大进步，象征着中国漫长的封建制度被埋进了坟墓。从这个意义上说，这里创造了历史！

华龙皇家陵园

愛新覚羅・溥儀　略歴

1906 年、愛新覚羅・溥儀は、北京の醇親王府で生まれた。彼の曾祖父は道光帝である。溥儀が即位したのは、わずか 3 歳の時であった。清朝最後の皇帝であり、中国封建帝制史上においても最後の皇帝である。年号は「宣統」で、それゆえ後世「宣統帝」と称するのである。

1909 年、溥儀の即位後すぐ、清朝歴代の慣例によって清の西陵に、陵墓適地を選定するとともに、施工を始めたが、退位後に工事は未完のままとなった。
1911 年、辛亥革命が勃発すると、溥儀は袁世凱により退位を強いられ、その短い皇帝生活に終わりを告げた。
1917 年、張勲の復辟により、溥儀は再度 10 日間だけ皇帝となった。
1924 年、馮玉祥は優待条件を無視し、溥儀を強制的に紫禁城から追い出した。溥儀らは転々としながら、最後には天津の租界内にある張園および静園へ移った。
1932 年、日本は溥儀を擁立し、満洲地区で満洲国をうち立てた。彼は満州国の執政となった。1934 年には、満洲国の康徳帝（1934 年―1945 年）と称号を改めた。
1945 年に日本は敗戦した。8 月 19 日、溥儀はソ連赤軍の捕虜となり、5 年後に中国へ戻され、撫順戦犯管理所に拘禁された。
1959 年、溥儀は特赦され出獄し、中華人民共和国の公民となった。溥儀はその後すぐ中国科学院北京植物園および全国政治協商会議文史資料研究委員会での仕事をあてがわれた。彼の著作として、自叙伝『わが半生』がある。
1964 年には、中国人民政治協商会議第 4 期全国委員会委員となった。1967 年 10 月 17 日に北京で病死した。
1995 年 1 月 26 日、溥儀夫人の李淑賢女史は、彼を北京の八宝山革命公墓からこの地に移した。皇帝から新中国の公民となった彼の生涯は、中華民族の飛躍と新生に寄り添ったものであり、波瀾万丈に満ちたものであった。また、中国が弱体した状態から強盛を誇るにいたるまで、民族が衰退した状態から隆盛を極めるまでを、その目で見届けたのである。
溥儀が、最後には一般市民として華龍陵園に埋葬され、その皇后、皇妃と合葬されたことは、中国社会の大いなる進歩を表しており、中国で長きにわたった封建制度が、葬られたことを象徴するもの

である。こうした意味からいって、まさしく、ここに歴史が作られたのだ。

華龍皇家陵園

一読して、溥儀の後半生を肯定的にとらえているのがわかる。これは、現代中国においては、最も典型的な溥儀に対する見方と言えよう（注 9)。

ただ、いくつか興味深い点もある。「満洲国」を「偽満州国」と表記するのは、通例通りだが、多くの場合は「東北地区」と表記するところを「満洲地区」と表記している。

それよりも問題になるのは、「同他的一后一妃合葬在一起（彼の皇后、皇妃と合葬された)」という記述が大きな矛盾点を孕んでいることである。前章でも述べたように、この墓所では、溥儀を清朝の「宣統帝」とは扱うが、「満洲帝国皇帝」としては扱っていない。婉容は確かに清朝の皇后として溥儀に嫁いだ（正確には、嫁いだ時点では清朝は滅亡していたが、建前上は宣統帝皇后であった）が、譚玉齢は、「満洲帝国」時代の后妃（正確には貴人）なのだから、中国歴史上の「后妃」扱いしては、現代中国の歴史観から見て、矛盾が生ずるのである。

もっとも、婉容はともかく譚玉齢は、溥儀が李淑賢と再婚する前、溥儀が最も愛した女性であった。そのため、彼女の遺骨を保管し、一緒に墓に埋めることを望んでいたという（注 10)。さらに、銘文の最後に記されているように、そうした大らかな見方自体が、近年、国際政治や経済分野において自信をつけつつある中国の余裕の表れかもしれない。

おわりに

そもそも、溥儀という人物は、清朝最後の皇帝、傀儡政権の満洲帝国皇帝、「改造」された公民など様々な顔を持っている。

そうした観点からすると、溥儀関係の史跡として、もっとも代表的

かつ定番といってもよいのは、長春の「偽満皇宮博物院」（満州国時代の帝宮）および撫順の戦犯管理所であろう。もっとも、この 2 か所は、溥儀個人というより、その背景にある事件や集団の史跡として扱っている側面がある。

また、溥儀の生家は、北京市西城区後海北沿にある「宋慶齢同志故居」としてその一部が公開されているものの、溥儀に関する史跡としての認知度は極めて低い。晩年の旧居にいたっては公開の目途もたっていない（注 11）。

本稿で述べた溥儀の墓は、その生涯の終着点の地であるが、皮肉にも商業主義に利用されているところに歴史の皮肉を感ずる。溥儀という、中国史上特異な人物の生涯が、現代の中国でどのように扱われ、また今後どう認識されていくのか。そういった意味でも、溥儀の墓とそれを取り巻く環境については、目が離せないといってよいだろう。

〔注〕

1　拙稿「兪平伯の「「儲秀宮」雑記」に訳注」（『中国研究』第 15 号 2007 年 12 月）においては、溥儀の紫禁城での生活の一端に触れた。また、昨年 11 月に、王庆祥《毛泽东、周恩来与溥仪》人民出版社 2012 年 5 月の全訳である『毛沢東、周恩来と溥儀』を科学出版社東京から上梓した。

2　2013～2015 年度麗澤大学経済社会総合センタープロジェクト「東アジアにおける史跡・文化と観光開発の諸問題について」、2016～2017 年度麗澤大学経済社会総合センタープロジェクト「教育が歴史、文化、社会に与える影響に関する研究～東アジア地域を中心に～」および麗澤大学特別研究助成プロジェクト「アジア地域の移動・流動する社会に関する歴史文化的研究」による研究助成を得て、溥儀関連の各地を訪問する機会を得た。本稿もその研究成果の一部である。

3　このあたりの経緯に関しては、王慶祥著松田徹訳注 1 前掲書 pp.365～374 および贾英华《末代皇帝的非常人生》人民出版社 2012 年 5 月 pp.411～417 参照。

4　遺骨を安置する際、骨箱の墓誌銘は、溥傑が躊躇したため、参列した溥儀研究者の賈英華が代わりに書いた。当時は、文化大革命が終息して間もなかったため、溥傑がかなり神経質になっていたという。溥儀という人物の扱いに、周囲の者が如何に緊張を強いられたかを物語るエピソードである。贾英华注 3 前掲書 pp.416～417 参照。

5　溥儀が 10 歳の時、端康皇貴妃が中心となり、清西陵内にある泰東陵の裏山に溥儀の「陵墓適地」を選定した。また、一説には、溥儀が 1909 年帝位に就くとすぐ、河北省易県旺龍村の「狐仙廟」を「陵墓適地」に選定した。この場所は、周囲 2 キロメートルの平坦な盆地で、三方をぐるりと山に囲まれ、一方は川に面している。陵墓の地下宮殿は盆地西北面に近い山の斜面に確定した。川を挟んで光緒帝の崇陵と向かい合う位置であった。1910 年に着工したが、後に辛亥革命が勃発して建設を中止した。その時、地下宮殿、地上の楼閣や周囲の城壁などの基礎工事は終わっていたという。王慶祥注 1 前掲書 pp.373 および徐广源《大清后妃私家相册》中华书局 2012 年 7 月 pp.304 参照。

6　那凤英《清西陵探源》河北科学技术出版社 2004 年 9 月 pp.272～273 および那凤英《清西陵旅游指南》河北科学技术出版社 2005 年 9 月 pp.82～83 参照。

7　李淑贤忆述 王庆祥撰写《我的丈夫溥仪（溥仪书系）》东方出版社 1999 年 1 月 pp.358、および、爱新觉罗　毓嵣《我与末代皇帝二十年　我自己的故事》』華文出版社 2010 年 4 月 pp.513～518 参照。

8　溥儀の遺骨がこの墓へ埋葬された直後、李淑賢は合葬の望んでいる（李淑贤・王庆祥注 7 前掲書 pp.358）。一方で、自分の遺骨は決して溥儀と一緒に埋葬していけない、なぜなら溥儀は漢奸としての半生があるので、自分も死後そのレッテルを貼られたくないからだ、という遺言を残したともいう（爱新觉罗　毓嵣注 7 前掲書 pp.218 参照）。入江曜子も、その説を紹介している（入江曜子『溥儀―清朝最後の皇帝―』（岩波新書新赤版 1027）岩波書店 2006 年 7 月 pp.233）。王開璽は、理由まで述べていないが、合葬を望んでいないことを記している（王開璽《両世溥儀》蒼璧出版（台北）2014 年 11 月 pp.201）。

また、ネット上にも出所不確かな情報が散見する。例えば、「历史趣闻网」というサイト内の「溥仪的前妻李淑贤死后葬在哪里」
（http://www.lishiquwen.com/news/59425.html　最終アクセス 2018 年 1 月 4 日）には、憶測めいた記事が載っているが、そこに掲載されている李淑賢の少女時代の写真は、明らかに別人のものであり全く信憑性に欠ける内容となっている。この点に関しては別の機会に譲りたい。

9　1950 年、溥儀はソ連から中華人民共和国へ引き渡され、撫順戦犯管理所において、「改造」という名のもとで、再教育を施された。中国共産党が、溥儀に対する「思想教育」に成功を収めたという、「皇帝から公民へ」というストーリーが、現代中国における、溥儀の生涯に対する一般的認識であり、溥儀関連の書籍や史跡の説明もこれに準じている。注 3 前掲書参照。

10　婉容と譚玉齢がこの墓に合葬されたのは 2006 年のことである。婉容生誕 100 周年を期して、弟の郭布羅潤麒の意向により、婉容の写真と生前使用していた手鏡を埋葬した、いわゆる衣冠塚である。徐广源注 5 前掲書 pp.337～9 参照。

11　溥儀が晩年を過ごした家は、北京市西城区東冠英胡同 40 号にあったが、2012 年 8 月、暴風雨に見舞われ倒壊し、現在も修復はされていない。ただ、地下鉄 4 号線新街口構内の付近案内地図には、「溥儀故居」として記載されている。

〔溥儀墓所関連写真〕

※写真 1～6、8 は 2017 年 8 月 16 日撮影。

写真 7 は、李淑賢著 王慶祥編 林国本訳『わが夫、溥儀』学生社 1997 年 5 月口絵写真より転載。

写真 1：華龍皇家陵園の入口

写真 2：霊園の入口に「溥儀墓」とはっきりと表示してある。

写真３：移動用のカート。霊園の広さがうかがえる。

写真４：園内にも「溥儀墓」の案内がある

写真５：皇帝陵を彷彿とさせるような参道

写真６：中央が溥儀、向かって右が婉容、左が譚玉齢の墓
左右一対の「華表」が目を引く。

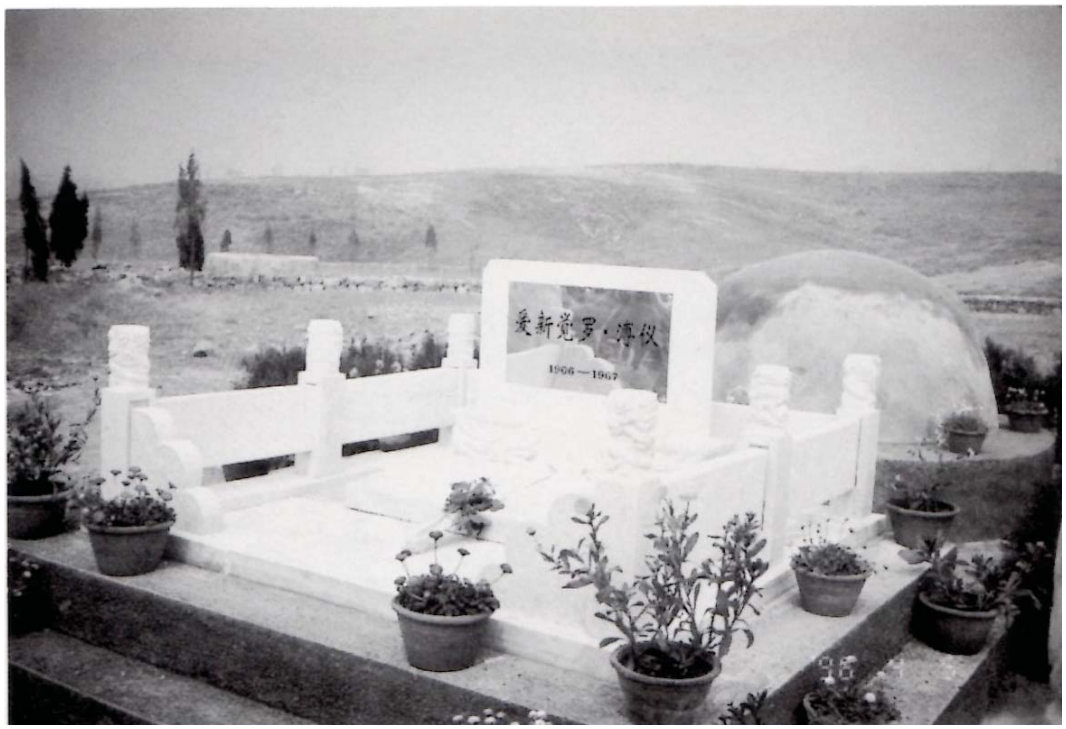

写真７：造成間もない 1996 年４月の墓の様子。
　　写真６と著しく形状が異なっている。

写真８：溥儀の略歴を記したプレート

〔参考文献〕

爱新觉罗　毓嵣《我与末代皇帝二十年　我自己的故事》』華文出版社 2010 年 4 月
入江曜子『溥儀―清朝最後の皇帝―』（岩波新書新赤版 1027）岩波書店 2006 年 7 月
王開璽《両世溥儀》蒼璧出版（台北）2014 年 11 月
王庆祥《毛泽东、周恩来与溥仪》人民出版社 2012 年 5 月
（邦訳　松田徹訳『毛沢東、周恩来と溥儀』科学出版社東京 2017 年 11 月）
贾英华《末代皇帝的非常人生》人民出版社 2012 年 5 月
徐广源《大清后妃私家相册》中华书局 2012 年 7 月
那凤英《清西陵探源》河北科学技术出版社 2004 年 9 月
那凤英《清西陵旅游指南》河北科学技术出版社 2005 年 9 月
羅哲文著　杉山市平訳『中国歴代の皇帝陵』徳間書店 1989 年 7 月
李淑贤忆述 王庆祥撰写《我的丈夫溥仪（溥仪书系）》东方出版社 1999 年 1 月
李淑賢著　王慶祥編　林国本訳『わが夫、溥儀』学生社 1997 年 5 月
『朝日新聞』1995 年 3 月 31 日 朝刊